

第7章 まとめと今後の課題

当事業では、来訪増加が期待される観光客に対し、体験学習型の観光メニューとして中城湾の海洋環境を活かした水中展望船事業の基本計画および事業性の検討を行うために、計画地（中城湾港（熱田地区））の現況把握や、中城湾の現況（海洋状況）の把握を行い、検討委員会を開催し、事業化基本計画および収支計画を取りまとめた。

本事業の検討結果を踏まえ、水中展望船事業の事業化に向け、今後も継続的に検討・設計を進める必要がある。以下に項目ごとに、本事業の取りまとめと、平成30年度以降の課題を示す。

（1）中城港湾（熱田地区）の整備計画について

中城湾港（熱田地区）の現況把握および港内静穏度の分析、施設整備について検討を実施した。

また、中城湾港（熱田地区）の潮位差は概ね2mであり、干潮時においては、物揚場の天端面と水中展望船のデッキ面の高低差が大きくなることから、水中展望船の乗り降りを円滑に行うために浮棧橋の設置が必要であった。今後、施設や配置や構造について、詳細設計を進めるとともに、以下の課題について検討を進める必要がある。

①ブシネスク方程式による港内静穏度の見直し

- ・本検討では、エネルギー平衡方程式および高山法を用いて港内波高を算出したが、中城湾港（熱田地区）の東側には、サンゴ礁の浅瀬が広がっているため、港内波高の算出においては、ブシネスク方程式による静穏度解析が適している。そのため、浮棧橋の詳細設計においては、ブシネスク方程式による港内静穏度の見直しを行うことが必要である。

②浮棧橋の詳細設計について

- ・本検討では、浮棧橋を物揚場（-2.0m）側に配置し、縦付け方向とすることを推奨した。今後、漁業関係者をはじめとした中城港湾（熱田地区）の利用者との協議を進め適切な位置および方向について検討する必要がある。
- ・また、浮棧橋の詳細設計にあたっては、引き続き、安定性（安全性）、利用性、経済性、および関係者の意見を踏まえながら総合的に進めることが必要である。

（2）事業化基本計画について

文献・ヒアリング・実見調査による中城湾の現況把握や、県内他地域の水中展望船事業者へのヒアリング調査より、中城湾の海洋環境は、西側の海洋環境に比べサンゴや観賞用の魚類が少ないため、差別化が必要であることが明らかとなった。

本業務では、県内西側の水中展望船事業との差別化を図るべく、「海中観察だけではなく、魅力的な乗船体験」、「充実したガイド」、「東海岸ならではの体験の提供」、「周辺の観光資源との連携」等について検討した。また、ターゲットについては、ヒアリング等より水中展望船の利用が見込まれる「外国人（中国、台湾、韓国など）」および「日本人のリピ

ーター層（ファミリー層、アクティブシニア層）」を設定した。下記に事業化基本計画における今後の課題および必要事項を示す。

①東海岸らしさを活かしたブルーツーリズムプログラムの磨き上げ

- ・本業務で検討したブルーツーリズムプログラムについては、東海岸らしい要素（朝日、健康）を取り込むとともに、実施に向け関係者を巻き込んだ磨き上げが必要である。

②運航コースおよび航行時間の検討

- ・本業務では、航行時間を往復 70 分と設定したが、旅行関係者よりツアー行程に組み込むには、長時間であることが指摘された。今後の具体化の中では、短時間で運航可能なコースを検討することも必要である。
- ・また、津堅島や久高島、与那原などへの長距離目的地へのイベントクルーズについても詳細に検討することが求められる。

③揺れの少ない船舶の設計

- ・乗船体験自体が魅力的な体験となるような揺れの少ない 3 胴型などの船舶の導入に向け、詳細な検討、設計等を進めることが必要である。

（3）収支計画（中長期計画）について

本業務では水中展望船事業の事業化に向け、人員体制、運航計画および各種経費を整理し、収支計画を検討した。

収支計画のうち、初年度の支出については、他地域の運航事業者よりプロモーションに係る費用が安定期以上に必要との意見等をふまえ検討した。

今後は、より詳細なターゲットの整理や、需要の推計を行い収支計画の精度を高めるとともに、事業手法の整理および推進のために、想定される管理運営主体との連携が必要である。

①プロモーション戦略の立案について

- ・設定したターゲット（外国人および日本人のリピーター層）に対し、今回検討したプロモーション費用を参考として、効果的なプロモーションに係る戦略立案、行動計画を策定することが必要である。

②運営体制の検討および構築

- ・実際の運営主体を検討・選定するとともに、水中展望船事業実施に向けた体制構築を進めることが必要である。